ボート競技の魅力を子供達へ

課外活動
地域交流

代表者：工学部機械工学科４年　八木　俊樹

連携先

茨城大学教育学部附属小学校

顧問教員

宮島　啓一（工学部　准教授）

参加者

渡邉　智樹（工学部　４年）
八木　俊樹（工学部　４年）
片桐　友也（工学部　４年）
小野村季子（教育学部　４年）
鬼沢　弥生（工学部　４年）
蒲地耕太朗（工学部　３年）
清水　　剛（教育学部　３年）
宮内　翔也（教育学部　３年）
三好由莉子（人文学部　３年）
奥村　大輔（農学部　２年）
佐々木浩武（工学部　２年）
竹内　　淳（理学部　２年）
山岸　康平（理学部　２年）
吉武　　亨（農学部　２年）
武田　未紗（農学部　２年）
舘内　沙季（農学部　２年）
市川　麻耶（教育学部　１年）
長　　拓也（工学部　１年）
首藤　沙耶（教育学部　１年）
白澤　龍太（工学部　１年）
告田　汐美（農学部　１年）
加藤　空良（教育学部　１年）
金田　美穂（農学部　１年）
生井　　遥（農学部　１年）

プロジェクトの概要

●背景

　ボート競技はオリンピックの種目になっていながらも日本国内ではまだまだ馴染みのないスポーツの１つである。ボート競技は“究極のチームスポーツ”とも呼ばれ、同じメンバーで何回も何回も積み重ねる練習の中で、ある時全員の動きが一つになる。一つの動きだけれども一人で出せる動きじゃない。仲間の動き・意識・呼吸のすべてが揃った時初めて感じられるフィーリングや一体感は、一度知ってしまうとまた味わいたくなる。そこで、我々は子供たちの未来にボート競技という新しい選択肢を与えたいという思いのもとチームを発足。本プロジェクトはそういったボート競技の魅力を茨城大学教育学部附属小学校の子供たちを対象にボート教室を実施し、ボートを体験してもらう。最終的に実際のレースに出漕してもらい、ボート競技の醍醐味を味わってもらう。また、本プロジェクトを通してより多くの方々にボート競技を知ってもらい体験してもらい、将来的な競技人口の増加を主眼に置いている。

●内容

①ボート競技体験

　小学生にボート競技を体験してもらう。毎週末に子供たちと一緒に練習し、同時に保護者の方々との交流をはかった。

②レース出場

　６月：水郷レガッタ
　11月：榊原杯

●目的

地域の方々とボート競技を通じて交流をはかり、より多くの人たちにボートを体験してもらい将来的なボート競技の競技人口を増加させること。

●連携の方法・内容

インターネットでの公募、学校訪問

●活動日程

6月上旬	プロジェクト開始
6月中	毎週末練習
6月29日	水郷レガッタ
7～11月	毎週末練習
11月22日	榊原杯
11月29日	関係者への報告会

プロジェクトの成果報告

●成果

本プロジェクトを実施して以下の2点の達成が成果として挙げられる。

①ボート競技という新しい世界を子供達や保護者の方々への構築

地理的な環境に影響されやすいボート競技は日常生活において体験できる機会がほとんどなく、茨城大学の近くに住んでいる人々ですら競技用ボートを見たことがある人はまれである。そんな中で本プロジェクトに参加した子供たちもボート競技を体験するのは初めてであり、保護者の方々も初めてであった。ボート競技という新しい選択肢を参加者に与えることができた。本来は小学生を対象に募集を募ったが、プロジェクトを進めていく中で保護者からもボートを漕いでみたいという声があがり保護者の方々にも体験していただいた。地域の方々との交流を深めることができ、結果的に参加者全員にボート競技を体験してもらえたため予想以上の成果である。

②子供たちが一つの物事をチームの仲間たちと協力し合い達成するために必要なチームワークおよび思いやりのこころを学んでもらえたこと

プロジェクト開始の6月下旬にボートに乗ることはできたが進めることができなかった。ボート競技において一番重要な全員で動きを合わせるということができなかったためである。また、同時期に行われた水郷レガッタでは小学生の部において最下位という結果に終わってしまった。そこで子供たちは約半年間の練習を重ねていった中でどうすれば上手に船を進められるのかを我々にヒントをもらいながら考え、話し合い、そして実践していった。毎週末練習をしていくうえで「今日は上手に漕げた」「今日はあんまり合ってなかった」などの感想が増えていき、11月に潮来市で行われた榊原杯では6000mという非常に長い距離ではあったが、小学生の力だけで漕ぎ切ることができた。ボート競技のレース距離は通常1000mもしくは2000mであるため、6000mの距離を漕ぎ切ることは非常に素晴らしいことである。これは子供たちのチームワークの向上と仲間を思いやるこころの習得が生み出した結果であるといえる。

③学生自身の成長

本プロジェクトを通して参加した学生にもさまざまな影響を与えている。子供達や保護者の方々と接する際のコミュニケーション能力の上昇、また、人に物事を教える難しさやそれに対するアプローチの方法、ボートを人に教えることで得られる新しい観点からの競技能力の向上などである。本プロジェクトを通して学生個人だけでなく1つのチームとし

て大きな成長をすることができたのではないかと思う。

ボート教室参加児童

ボート教室集合写真

榊原杯集合写真

榊原杯の様子

●今後の課題・展望

本プロジェクトを通じて、地域の人々との関わりを持ち、ボート競技について知　ってもらうきっかけ作りができた。しかしながら、ボート競技の認知度は十分に浸透していない。子供たちにボートの魅力を伝えることで、ボートという選択肢を与えることができ、今後のボート競技人口の増加につながると考える。そのためには、より広報活動に力を入れる必要がある。例えば訪問校の拡大やSNSの利用などがあげられる。今回は小学生のみの対象であったが、今後は中学生、高校生と対象の幅を広げ、ボートを通じて地域との交流を深めていけたらよいと考える。また、今後はボート競技というスポーツの面からだけではなく、私たちの活動拠点である那珂川に関するフィールドワークや那珂川の環境や素晴らしさ、流域地域に対してどのような影響を与えているのかなどに関する情報の発信を含めてより「地域」というワードに根ざしたプロジェクトの展開を展望としている。